

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# 天空戦姫 カスターローゼ

小説 竹内けん

挿絵 しなのゆら

第一話 女神と悪魔と姫君と……

第二話 天使と魔女とおねえさまと……

第三話 列車と聖槍と時計台と……

第四話 触手とアナルビーズと本物と……

006

056

118

177

## 登場人物紹介

Characters



### カスターローゼ

ヴァイレス王国の第一王女。王国の危機に際し、アーネの協力を得て救国のヒロインへと変身する。清楚で鷹揚とした雰囲気のある、金髪、碧眼のお姫さま。

### アーネ

宇宙的犯罪者を追ってきた星間警察の保安官。サーヴァント逮捕のため、カスターローゼを正義のヒロインに仕立てる。快活で気さくな性格。

### エスメラルダ

ヴァイレス王国の筆頭家臣であるセイネス公爵家の令嬢。サーヴァントの力を借りて王家転覆を謀る。日焼けした肌に黒真珠のような瞳を持つ、気高く勝気な少女。

### サーヴァント

宇宙的犯罪者。アーネに追われて辿り着いたこの星で、もうひと騒動を起こそうと企む愉快犯。

### レイモンド

カスターローゼの兄でヴァイレス王国の王太子。実はキレ者との評判が高い。

乙女の耳元で意地悪く笑った魔女は、周囲の兵士たちを見回す。

「ちよつと、そのあなた。戦功の褒美をあげるからこつちにいらつしやい」

戸惑う天使が見守るなか、主君のご指名を受けた兵士もまた戸惑ったようだが、指先で  
チヨイチヨイと来るように命じられると逆らえず進み出た。

「ズボン脱ぎなさい」

「こ、ここでありますか？」

雲上人である貴族令嬢の口から出たとしてもない命令に、その若い兵士は愕然と立ち尽  
くす。

「そうよ。とつとと下半身裸になりなさい。そしてオチンチンを晒しなさい」

苛立たしげな姫君の様子に恐怖した兵士は、慌ててズボンを脱ぎ去る。

セイネス家の領民に慕われていた公女だが、最近の人間離れした所業によって完全に畏  
怖の対象となっていた。

処女姫は慌てて視線を逸らすが、高慢な非処女姫のほうは恥ずかしげもなく、堂々と男  
の股間に一瞥をくれて一喝した。

「なによこれ小さいじゃない。あなた存外見かけ倒しね」

「申し訳ありません！」

このような状況で、勃起してられる男というのはそうそういないだろう。

「まあ、いいわ。ようは大きくさせればいいだけのことだし。ほら、自称天使さん。啞えてやんなさい」

「そ、そんなことできません！」

横目で男性器を気にしながらも、天使はきつぱりと拒絶した。

それを受けて魔女は軽く肩を竦めてみせる。

「そういえば、先の戦いの捕虜が何人かいたわね。あなたが指示に従わないと、彼らを殺すわ」

あっさりと言ってのけた公女のとんでもない脅迫内容に、心優しい王女さまは驚愕し、下から睨みつけた。

「あ、あなたという人は、……見損ないました」

「ふん、わたしをどう見ていたのかしら？ そんなことはどうでもいいから、早くしなさい」

怒る天使の背後に回り込んだエスメラルダは、無様に濡れ汚れてしまっている女の股座を、つま先でツンツンと小突いた。

「うっ、わかりました。わかりましたから、そこを蹴らないでください」

軽く蹴られただけなのだが、蹴られた身にはたまらない。大きなお尻をくねらせながら、慌てて兵士のまえに跪いた。

「あの……それじゃ、唾えさせてもらいますね」

だらりと頭を下げている肉棒をまえに、兵士の顔を見上げて礼儀正しく宣言したのは育ちのよさの表れである。

碧色の瞳を涙目にしながら、半透明のアイマスク越しにはじめて見た異性の性器を、マジマジと観察していると、ムクツと鎌首が頭をもたげた。思わずビクンツと後ずさる。

「あの……、これいま大きくなったんですけど」

見る見るうちに信じがたい膨張率を見せる異物をまえに処女姫は、目を白黒させて脅迫者にお伺いを立てる。

「オチンチンは大きくなったり小さくなったりするものよ。そんなことも知らないの？」  
軽蔑しきった答えを聞いて、そういえばネエヤがそんなこと教えてくれたことがあったような気もするな、と遠い目をして記憶のページを捲ったが、そんな悠長なことは魔女が許さなかった。

「早くしなさい！」

叱責を受けた天使は、兵士の肉棒を両手に取って、顔を近づけた。

戦場に立つ男に清潔さを求めるべくもない。無菌室で純粹培養された王女さまには耐えがたい、膣<sup>す</sup>えたような異臭が鼻をつく。

それを気力で我慢して、口を開き、舌を出し、先端をチロリツと舐める。

生暖かく、決して美味しいといえるものではなかったが、齋王や救国のヒロインを引き受けるくらい、責任感が強く博愛精神に満ちている姫は、やるしかないんだ、と一度思えば、いかに不潔な男根といえども、嫌悪するようなことはなかった。

それどころか、男が感に堪えないといった鼻息を漏らしているのを見て、彼が気持ちいいのならば、男の様子を観察しながら、亀頭部の裏筋や、よく張っているエラの裏などをペロペロと舐め回してやる。

すると、肉棒の強度はどんどん増していき、先端からは透明な液体が出てきた。当初、それと気づかずに舐めてしまった王女さまは、なんか味が濃くなってきた、と戸惑いながらも、唾液と混ぜ合わせて、亀頭部をピカピカに濡れ光らせた。しかし、見学している魔女は満足しなかった。

「それは啜えているんじゃないやなくて、舐めているっていうの。オチンチンを口いっぱい頬張りなさい」

背後から剥き出しの陰唇を蹴り上げられたカスターローゼは、すぐさま肉棒を啜えられるだけ、口内に呑み込んだ。

「お優しい天使さまがオチンチンに歯を立てたりしないわよね。そこは男の急所でもあるのよ。嘔み切りでもしたら、彼の男としての生涯はこの若さでおしまいよ」

そんな脅しを受けるまでもなく、優しいお姫さまに男性器を嘔み切るような勇氣はない。

「うっ、ん、ちゅう……ん」

言われるままに、男の尻を両手で掴み、唇全体を使って、男根を抜きながら、頭を前後させる。口が塞がっている以上、鼻で呼吸することになり、男の陰毛が靡く。

奉仕を受ける兵士は申し訳なさそうな顔で見下ろしているが、カスターローゼは「あなたが悪いわけではないのだから、気にしないでください」とでも言っているかのように微笑を返した。

もともと見る者に守ってあげたい、という気分を起こさせずにはおかない不思議な雰囲気がある王女さまである。フェラチオを受けながら笑みまでもらってしまったら、どんな男でも惚れてしまうだろう。

そんなふたりの妖しい雰囲気を感じた公女はただちに不機嫌になった。

「あなた下手糞ね。そんなんじゃ男はいつまでたっても満足しないわよ」

いきなり黄金の頭髪を驚掴みにすると、容赦なくズコバコと前後に振るったのである。

「うぐっ！」

喉奥まで肉棒で突かれてカスターローゼは吐きそうになったが、そんな暇もなく、一段と強度が増し、エラの張った肉棒は、上顎や舌、歯茎、頬などを突き上げ、容赦なく蹂躪していく。

また口内だけのことではなく、鼻の頭が陰毛に埋まり、鼻の穴の中にまで入ってくるの



が耐えがたかった。

うっ、顎が外れそう、と苦悶しながら、なにげなく視線を周囲に向けると、いまさらながらたたくさんの兵士たちの視線があった。

瞬間的に、我に返り、惨めさが胸中を貫く。

被虐心というのが、はじめて芽生えた乙女の口の中で、肉棒が一段と膨張した。

「うっ」

驚き戸惑ううちに、口内にどつとばかりに熱い液体が入ってくる。

口腔から鼻腔にかけて、一気に生臭さと男臭さが広がり、これには耐えられず、驚いて吐き出してしまった。すると、顔にドパドパと浴びせられる。

眼前で起こった射精。アイマスクのおかげで目に入らないということもあり、呆然と見入ってしまった。

無限に続くかとも思えた射精が終わったところで、エスメラルダはその兵士に下がるように合図した。兵士は慌ててズボンを穿くと、もとの隊列に戻っていった。

「どうだった。精液の味は」

「……えぐっ、苦いです」

天使は両手を大地について、ゲイゲイと吐いていた。

「あらそう。でもつぎはいよいよここで味わう番ね」

剥き出しの陰唇の中に黒い手袋をした指先を添えられる。

「やめて！」

「じゃやめたわ」

「……！」

天使の懇願を、魔女はあっさりと受け入れた。まさか許してもらえとは思っておらず戸惑っている天使を、冷厳と見下ろす。

「処女膜をオチンチンで破るなんて贅沢、あなたにはさせてあげない」

究極の箱入り娘といえる王女にとって、現在でさえすでに想像の限界を超えた悲劇なのである。幼馴染みの主張にはついていけず瞬きをする。

もちろん、見ず知らずの男に強姦され処女を失うという初体験を、彼女がしているとは、夢想だにできない。

「あなたの初体験は、この世の女が味わえるもつとも悲惨なものにしてあげる」

エスメラルダからすれば、この天使の初体験は、自分のものよりももつと悲惨なものではない気が済まないのだ。

「周囲を見てごらんさい。あなたを犯したいオチンチンが山ほどあるわ。でも、あなたにはあげない」

気取った仕草で周囲を指し示す魔女を見上げて、脱力している王女はどう反応している

かわからない。

「わたくし、さきほどちようどいいものを見つけましたの」

莞爾と笑ったエスメラルダは、またもカスタローゼを触手で捕らえると、幼女に用を足させる姿勢で、王都ルーンレイの市内に入った。

空を飛べるエスメラルダのまえには、王都の防壁などなら障害物にならない。易々と飛び越えると、城下町を我が物顔で飛翔する。

矢も鉄砲も通じないと諦めているらしく、城内にいた兵士や民間人は、濡れそぼった陰唇を晒している天使を、ただ呆然と見上げていた。

そして、止まったところは、王都のどこからでもよく見える場所。庶民たちの生活に欠かせない時計塔の屋根の上である。

当然ながら、一番目立つ位置にある。ある意味、王城よりも庶民の多くの視線が集まりやすい場所だった。

「この時計台の尖塔なんて、あなたの処女を破るのに相応しいんじゃないかしら♪」

「な、ななな……」

あまりのことにカスタローゼは言葉が出ない。

時計台の天辺にある雷避けの尖塔。その上で股を開いた形で抱きかかえられているのだ。

「ちよつと太すぎるかしら？　でもまあ、いいか、大は小を兼ねるっていうし」

エスメラルダは他人事だと思つていいかげんなことを言うが、カスターローゼの手首ぐらいの太さをした円柱である。

「う、うそでしょ、やめて、冗談ですよ、こんなの酷すぎます」

恐怖に竦み上がる乙女を抱えて、黒い悪女は愉快そうに嘲笑する。

「そうね、酷いわね。そして惨めねえ。その日のパンにも事欠くような貧しい市井の二目と見られないブスだつて、自分に見合つた男に身体を捧げるわ。でも、あなたはこんな血肉の通つていない異物を使つて、女に強姦され、処女を失うのよ」

乾いた尖塔の先に、濡れた陰唇があてがわれ、颯るように前後に擦られる。

「ヤダ！　わたしこんなのヤダーッ！」

王族としての誇りも、恥も外聞もかなぐり捨てて、死に物狂いで抵抗したが、触手に捕らわれた身体には、もはやたいした力は残つていなかった。ただ、公女の嗜虐心を満たしてやつただけである。

「あはははっ……あなたの下のお口はそうでもないみたいよ。なんでもいいから塞いでくれって言っているわよ」

いくら清純な乙女といえど、お年頃である。肉体は男を迎え入れる用意ができていて、それも長い愛撫と羞恥責め、さらには牡汗を浴びせられたことで、発情した牝になつて

いた。

陰唇は、そこだけ別の生き物であるかのように収縮して、愛液を溢れさせ、尖塔に滴っていく。

「うん、これだけヌルヌルしていれば、まあ、問題なく入るわよ」

大股開きの肢体が少しずつ下ろされていった。

自重による圧迫によって、尖塔は女肉にもぐり込んでいく。メリメリという肉が裂ける音が聞こえるようであった。

「ひい、ひいひいひい」

股間の穴が広げられるほどに、喉も広がり、殺されゆく獣のような悲鳴が漏れた。

風雪に耐えてきた文字通り鋼の如き硬き異物。それが乙女の粘膜をザラザラとやすりのように削りながら押し進んできた。

当初は濡れそぼっていることもあつてか、肉体を広げられる違和感こそあつたが、それほど苦痛ではなかった。しかし、

ブチッ……。

「ひあああああああああ！」

なにかが裂けた。一気に脳天まで激痛が走る。

神聖にして不可侵、鋼鉄の処女ともいえる、永遠の乙女。王女にして巫女長。世に斎王

と呼び慕われる高貴な女性の処女膜は、こうして衆人環視のなか破られた。

もちろん、見上げている庶民も兵士も、そしてエスメラルダも、目撃しているすべての者が、王国でもっとも大事な女性の破瓜に立ち会っているのだとは知らない。

乙女の悲痛な悲鳴を、天上の音楽に耳を傾けるように、楽しんでいた魔女が、天使が落ちつくのをまっつて豊かな金髪の中に顔をツッコミながら、恍惚と囁く。

「どう、初体験の感想は？」

「ぐう……痛いです。抜いてください」

串刺しにされている天使は蒼白な顔で、弱々しく懇願する。

「いいわ。苦痛と絶望に満ちた表情とそれに負けない惨めな声。もうわたくしも失禁しそうなくらい興奮するわ。背中がゾクゾクする」

得意になっているエスメラルダは、サドとして目覚めてしまったのだろう。感に堪えないといった様子で溜息をつくと、相手の身体を持ち直した。

「入れられただけで終わりなんて思っているのかしら？」

「……」

「男女の営みってやつはね。入れられてからが本番なのよ。ズコバコと出し入れされて、グチャグチャに掻き混ぜられるの」

「そ、そんなウソです。そんなことされたら死んでしまいます……」

ガクガクと震える天使の恐怖の強張りを全身で受けとめる魔女にとって、それは歓喜の震えとなる。

「ウソじゃないわよ。ネンネはこれだから困るわ」

魔女の両腕が、苦悶する天使の乳房と肉芽に手をあてがわれ、優しく弄ばれる。

その手つきは、オナニーのようである。興奮状態にあるエスメラルダの身体は、慰められることを欲しているのだが、プライドの高い彼女が人前で自慰をするはずがない。そこで自分に施したいと思っている愛撫を、背後からカスターローゼに与えて擬似体験しているのだ。

手は自流の動きをしながらも、自分の身体は慰められていない魔女の口唇から吐き出される吐息は、熱く湿っている。辛抱たまらず自らの両の乳房を背中に、股間を尻に押しつけて上下に擦りつける。

「わたくしって親切だから、こんな憐れな初体験をしている女に、きっちり男に犯されたことの間を教えてあげるわ。さあ、楽しんでなさい」

嗜虐的な笑みを浮かべた魔女は、憐れな天使を抱えて引き上げ始めた。

「あっあっ……ああっ」

天使の喉から間欠的な悲鳴が上がる。すぐにでも抜いてもらいたいと思っていた異物だが、ゆっくりと膣から抜けていく感触は、お腹の中のものを引き出されるような気分なの

だ。

腔壁はみっちり、この冷たい異物に食いついていたのだ。鉄棒が引き抜かれるに従って、女の内側の粘膜が捲れ返るような不安。しかし、抜かれることはなかった。ついで、鬢肉を捲りながら、尖塔は容赦なく突き進んできて、半分も入ったとき、女の隧道すいどうの最深部に達した。

「ひっ」

子宮口を打たれた瞬間、ビュッと腔の入口から液体が迸る。

そんなことにかかわりなく、魔女は夢中になって上下運動を繰り返した。

天使とともに踊る魔女の腰使いは、女が騎乗位を楽しむときの動きそのものである。しかし、彼女自身は、異物の挿入がなされているわけではない。欲求不満なのだろう、どんな激しい動きになっていく。

そんな動きをカスタローゼが耐えられるはずもなかった。内臓を掻き混ぜられ、鬢肉を蹂躪され、子宮口が打たれた。

そのたびにビュッ、ビュッとオシッコとも愛液とも取れる液体が噴出する。

朦朧とした意識のなかで、「ああ……股間からお口までつき抜けそう」と感じていたが、腔奥をかつてないほどに突き上げられた瞬間、ブシャッと弾けるように液体が噴き出した。シユワワワワ——ッと透明なお小水が迸り、放物線を描いて撒き散らされる。これに





は夢中であつたエスメラルダも気がつき、ようやく破壊的な動きを止めた。

「あらあら、お漏らしまでするなんて、ほんと最低の初体験ね。いい気味だわ。おーほほほほ」

時計台から時ならぬ雨が降り、鮮やかな虹ができた。エスメラルダの悦に入った高笑い  
が、王都ルーンレイに響き渡る。

貞操というものは、淑女教育を受けた女ほど大事にするものだ。

カスターローゼはあまりの惨めさに鼻を嘔りながら、自らの下半身を見下ろしている。

女の柔らかい肌に、無機質な金属がぶち込まれているさまは、あまりにも非現実的な光景である。また、お漏らしが止まらない。止めたいという意味はあるのだが、股が裂けそうなほどに痛い、いや、実際、裂けている。白い尖塔を鮮血が滴るのだ。

胎内を埋め尽くす冷たい異物のせいで、尿道を締めるという、ごくあたりまえの肉体操作ができなかつた。

「いいオブジェができたわ。題して『天使の破瓜』エスメラルダ作といったところかしら、王都の名物になるわね♪」

周囲から見上げる者たちにとってその光景は、天使と魔女による一對の淫らな彫像であつた。



「そ、そんなこと言われても……困ります、あう」

カスターローゼはアーネとは違って同性愛嗜好はない。だからといって、別に男性に対しても特別な思い入れはなかった。性欲というものとほとんど無縁であった彼女は、いわゆるノンセクシャルであったのかもしれない。

しかし、いま肉体は完全に女であることを自覚した。男に組み敷かれ、犯されていることに喜んでいる。

理性が溶けていく。もう身体を駆け抜ける悦楽以外考えられなく、いや、感じられなくなる。

アーネは乳房を揉みながら、カスターローゼの左耳を舐めて嘔いてくる。

「カスターローゼ……気持ちいい……？」

「う……んっ！ すご……っ、あああっ！」

「どこが気持ちいいの？」

「へ、変なんです、あそこが熱くて、身体中がゾクゾクして……あああっ」

白い喉をさらけだすように頭を仰げ反らせ、汗がびっしりと浮かび、ほのかな甘い香りを撒き散らしている。まさに男に犯されて喜んでいる女の痴態である。

「じゃあ……もつと気持ちよくしてあげる♪」

アーネは向きを変えた。男女の結合部分に顔を近づけたと思ったら、勃起し包皮から剥



け出ているクリトリスを、前園でカリッと甘噛みしたのである。

「ひっ!？」

驚愕に大きな碧眼を見開き、溜まっていた涙をどっと溢れさせた。

「くあああああつ!」

背を反らし、ビクッビクッと右足から始まった痙攣が肢体を駆け抜ける。

ペニスをぶち込まれた状態での絶頂は、クンニでの絶頂とはまったくの別物だった。

より深く女体を蝕むのだ。快感のあまり目の中で凄まじい閃光を感じたカスターローゼは、目をきつく閉じ、代わりに口唇は思いつき開いてしまう。

「くっ! 締まる……」

突然始まった女の絶頂に、男が焦りの声を漏らす。

ただでさえ絶世の名器を堪能していたところに、膣圧が一気に高まったのだ。

意表をつかれたということもあるだろうが、女慣れした男でも耐えられず、情けない断末魔の呻きを漏らす。

ドクッ、ドクッ、ドクッと勢いよく吐き出される精液。そのおぞましさにカスターローゼはブルブルと震えたが、いつしか男の脈動に合わせてビクッビクッビクッと痙攣する女体があった。

「いぎっ……っ、ひぐうううっ……!」

男の絶頂を受けてのより高い極みにカスターローゼは、歓喜の世界に咽び泣いていた。

「熱い……」

膣内に熱く煮えた牡汁を注ぎ込まれたのは初体験である。熱い粘液でいっぱいになって、それが溢れ返って逆流する感触。それはどうしようもなく気持ち悪いのに、妙な充実感がある。この感覚は女の本能なのだろう。

しかし、同時に女として、自分の性が汚されてしまった、という絶望感が胸中を漂う。

たっぷりと注ぎ込んだサーヴァントが逸物を引き抜くと、よくもまあ可憐な乙女の体内にこれほどの液体が入っていたものだ、と見る者を呆れ返らせるほどの、牡汁と牡汁の混じりあったものがゴボゴボと溢れた。

「かわいかったわよ。カスターローゼ……」

「んっ……」

慈母に縋る幼児のように、カスターローゼはアーネにしがみつくと、夢中になって口づけをした。いまはとにかく人の温もりが欲しかったのだ。その心境を察して、女神さまは優しく抱き締めてやる。

「やってくれますね。アーネさん。これではわたしはただの肉人形で、カスターローゼさんはあなたに惚れてしまします。それではいささか面白くないですね」

サーヴァントは苦笑して肩を竦める。

アーネはそれどころではない。はじめてのセックスを終えたカスタローゼは、後戯を求めていた。火照った身体を持て余し、アーネにがちりとしがみついて、接吻に夢中になっているのだ。いままで口説こうと躍起になっていた相手が、はじめて積極的に求めてくれるのだから、これに勝る喜びはない。

しかし、そんな女同士のささやかな喜びを、男はいつまでも許してはくれなかった。

「触手操作はエスメラルダにくれてやりましたから、今度はこんなものを用意してみました」

アーネがなにか舌戦を挑もうとするよりも先に、その場にいるただひとりの男は、気取った仕草で、指を鳴らした。

「では、みなさん出番ですよ」

合図に応じて、一万人以上が腰掛けることができるように、半円形に並べられた礼拝堂の長椅子から、ガタガタガタ……と、いつせいにながなが立ち上がった。

「ひっ！」

その音に驚いたカスタローゼが喉をひくつかせる。呆然と立ち尽くしていたエスメラルダもまた、ビクンッと背筋を跳ねさせた。

そこには宮廷服に身を包んだ紳士淑女からはじまって、侍女や侍従などなど貴卑男女は問わず、王宮に出入りし働いている者たちの姿があった。



全席満員というわけではないが、一千人ぐらいはいるだろう。

これほどの大人数が同じ室内にいたというのに、その存在にまったく気づかなかったのは、お姫さまたちが、普段からなにがしかの視線を浴びることを日常として、他人の視線に無頓着になっていたことや、サーヴァントが演出する痴態劇に気を取られていたということもあるが、そこにいる人々の様子が尋常ではなかったからだ。

「み、みんな死んでいるの……?」

声を絞り出したのはエスメラルダである。奥歯がカタカタと鳴り、寒気を感じるのか両腕を抱いている。

見知っている顔が大勢あるのだ。

さまざまな夢や野心に輝いていたはずの彼らは、まるで生きる死体であるかのように目が虚ろで、まったく覇気が感じられない。

「おや、エスメラルダ、震えているのですか？ 王位篡奪を企み、世界の女帝として君臨しようという女性が、たったこれだけの人数が死んだだけで、顔色を変えてはいけませんねえ」

エセ紳士は、公女の手を引いて、説教台に上がる。

このときサーヴァントは気づいていなかった。エスメラルダの操る触手によって、カスターローゼは両手首と首を拘束されていたのだが、いつのまにか両手首の拘束が解かれてい

ることを……。

公女のほうは、触手を操っている本人だけに気づいてはいたが、ほかのことに気を取られていたため、なにかのはずみだろうと問題視していなかった。

「うふふ……ご安心ください。生きていますよ。わたしはなにごともスマートなのが好きでして、あまり血なまぐさいのは嫌いなんですよ。宇宙警察とは違ってね」

「……」

アーネは、なにかいろいろと言いたそうだったが、黙っていた。

「ちよつとばかり理性の籬かきは外れていますがね。あ、脳を弄ることを酷いなんて思わないでくださいよ。こんなのはその宇宙警察の女刑事さんもしたことです。そうでなければ彼女が侍女としてもぐり込めるはずがないでしょう」

サーヴァントは、呆然と立ち尽くしている公女に歩み寄ると、その手を取った。

「女帝たらんとする方が、オナニーでは寂しいでしょう」

男ひとりに女ふたりが演じる痴態を、間近に見、淫臭を吸っていたエスメラルダは、辛抱たまらず、自らを慰めていたのだ。

気位の高い彼女は、自洗などしたことがないし、そんなことをすることは大変な恥だと考えていたから、気づかれないように、こっそりとしていたのだが、サーヴァントはしっかり気がついていたので。

知っていながら、気づかないふりをしていた。つまり、焦らして遊んでいたといえる。愛情しきった肉体を持て余した牝は、男に腰を抱かれ、剥き出しの乳房を弄ばれながら、唯々諾々と礼拝堂備えつけのパイプオルガンのもとにまで連れていかれる。

「では、この星の女帝エスメラルダが誕生するための、華麗なる第一歩を踏み出した記念のパーティーを始めましょう」

席についた裸の男はパイプオルガンを奏で始めた。すると未来の女帝たる女が、命じられもしないのに、男と楽器の間に蹲踞そんきょすると、男性器を手に取り、舌を伸ばして奉仕を始めた。そうするように仕込まれてしまったのだろう。

その姿は女帝どころか、ただの性奴隷である。

とはいえ、彼女はかつてないほどに欲情していた。幼馴染みで、いつもなにかといえればべられた目の上のたんこぶであったカスタローゼが、あのような惨めな姿になるのを目の当たりにし、いままたもっと悲惨な目に遭おうとしているのだ。興奮しないはずがない。莊嚴なる調べに合わせて、幽鬼のような男女が、腰が抜けて立つこともままならず、ただ抱きあっている女ふたりのもとに寄ってきた。

アーネはとっさにカスタローゼを庇おうと、上から覆い被さったが、その尻を持ち上げられた。そして、サーヴァントにたつぷりと犯されたあと、カスタローゼに舐め清めてもらった陰唇に、新たに肉棒をぶち込まれた。

「くっ」

苦悶の表情を浮かべる美女の口唇にも、新たな逸物がぶち込まれた。

前後から串刺しにされた女を犯す男たちは容赦がなく、子宮を突き、喉奥を突いてくる。

「アーネさん——！」

そんな姿を目の前で見せられてしまったカスターローゼは、喉を引きつらせるようにして呼んだが反応はない。

生きる死霊のような貴人たちの腰使いは激しかった。小難しいテクニクなどに走る様子もなく、ひたすらに突貫を繰り返し、喉奥と子宮を犯すのだ。

その強い刺激と、頭の箍を緩められたということで、あまり我慢が利かないせいとか、サーヴァントに比べると随分と短い時間で、ふたりは果てた。

どっと溢れ返る白濁液を、前後から浴びせられて、アーネは白目を剥いた。特に口腔奥深くに注がれた液体は、逆流してカスターローゼの顔にまで降ってきた。

「いや——ッ！」

王女の絶叫が合図でもあったかのように、メイド姿の女はゴロリと転がった。

女体という傘がなくなつたため、犯罪者に打ち抜かれたあとの無防備な姿勢のままである変身ヒロインの肢体が、生きる死霊たちのまえに晒される。

これからなにが行われるか、理性ではなく本能で察したカスターローゼは、逃げたかった。

事実、逃げようという努力はしてみる。しかし、手足の力がまったく入らない。

「いや、やめて。いや、やめなさい。わたしはヴァイレス王国の王女カスターローゼです。臣下たるあなたたちがこのようなことをしてはいけません。神官を侮辱すると天罰が下りますよ」

いままで一度もしたことがない権柄けんべいついた言い方をしてしまったことが、この心優しき王女さまが精神的に相当参っている証でもあるだろう。

思いつくままに説得しようと努力したが、相手の目の色を見れば、それが無駄な努力であることを悟らざるをえない。

ごく無造作に両脚を抱えて、男のしかかってきた。猛り狂った男根が、白濁液の詰まっている陰唇の中に収まってきた。

「あ、あああ……」

果てたばかりの粘膜は敏感である。快感というよりも鈍い痛みを感じるが、その中に、鋭い性感があった。

「あつ、あつ、んぐっ……んんん——っ」

腔にぶち込んだ男がリズムカルに子宮口をつついてくる。中に詰まっている熱い煮汁がグチュグチュと掻き混ぜられ、身体が熱く煮えたぎったスープにでもされてしまったような気分だった。その女体にたまった熱を逃がそうと、大きく口を開けて喘ぎ声を上げると、

その可愛らしい口にも凶悪な逸物がぶち込まれてしまう。熱を放出できなくなり、目を白黒させていると、両手にもそれぞれ温かいものを握らされてしまう。

握ると妙に弾力のあるものである。不可解に思いながら目を向けると、それも男根であることがわかった。慌てて手を放そうとしたら、その上から握られて、強制的に手コキをさせられてしまった。

膣と口と両手で、合計四本の肉棒に責めさいなまれていたカスターローゼに、さらにもうひとり乗ってきた。

彼は、カスターローゼの胸部を跨ぐと、華やかな衣装に包まれている乳房を両側から抱きかかえ、胸の谷間に逸物を挟み込んできたのだ。つまり、パイズリである。

優美にして華麗な金髪は背中て扇のように広がり、男たちに踏みにじられていた。

姫処では、不埒な肉棒が美しい絹草を荒らし回りながら、花園を蹂躪している。

典雅にして清純な白い肌、その練り絹もかくやという肌触りの豊麗な乳肉に包まれて、熱い肉棒が激しく踊っている。薄布越しにも痼り立つ乳首が、男のカロの部分の両側から擦り抵抗になる。

よく整い、艶やかさの中にも童女のような愛らしさが色濃く残っている容貌の口唇は大きく開かれ、喉奥まで異物を押し込まれ、涙目になってえづきながら涎を溢れさせている。息苦しいのだろう、長手袋に包まれた纖手がギュッと両の肉棒を握り締めている。

王女とか姫君という言葉をもって語られる女性の理想像というべき、清雅なる聖女が、全身に男の温もりを感じて泣いていた。

最初に果てたのは膣内に入っている男だった。まったく女の身体を思いやる余地もなく、一方的に浴びせたという感じだ。前後して咽喉を犯していた男が果てる。

「んぐっ！」

口内に注がれた精液で喉が詰まった。苦い味が口腔を満たし、鼻腔を牡の臭いが包んだ。すぐに両手のペニスも果て、胸から顔に向かって熱い白濁液が飛んだため、視界が真っ白になってしまう。

酷いことをする、という憤慨の気持ちと同時に、女体の中ではそれをよしとする部分があった。

自分の感覚に違和感を感じる間もなく、新しい肉棒が膣内に入ってきた。

これまでの経験で実感したことだが、カスタローゼがもつとも気持ちいい瞬間は、男が膣内で果てたときである。男根の肉幹が一気に膨張し、筒中をドクンドクンと脈打ちながら流れた熱い液体が、先端から勢いよく飛び出し、浴びせられる。この瞬間、男根の脈動に合わせて膣は収縮し、子宮が跳ね上がる。

しかるに、その一度のセックスで一度しか味わえないはずの至福が、連続してくるのだ。「うっぐ、うぐぐぐぐぐぐ……」

男たちは次々とカスタローゼの中に入ってきた。そして、馬車馬のように動いて果てた。逆流する精液の蓋をするように、新たな男根が打ち込まれ、褻を搔きむしって果てる。その繰り返しだった。

不意に膣壁が右回りに搔き回された。いままでと違う刺激に目を白黒させていると、目の前に床があった。すなわち、女体のほうが回転し、正常位から後背位へと変わったのだ。しかし、男たちの行為自体は変わらず、気がつくともまた天井を向いている。そんないろいろな体位で注ぎ込まれるほどに、女の心は虚無になっていく。

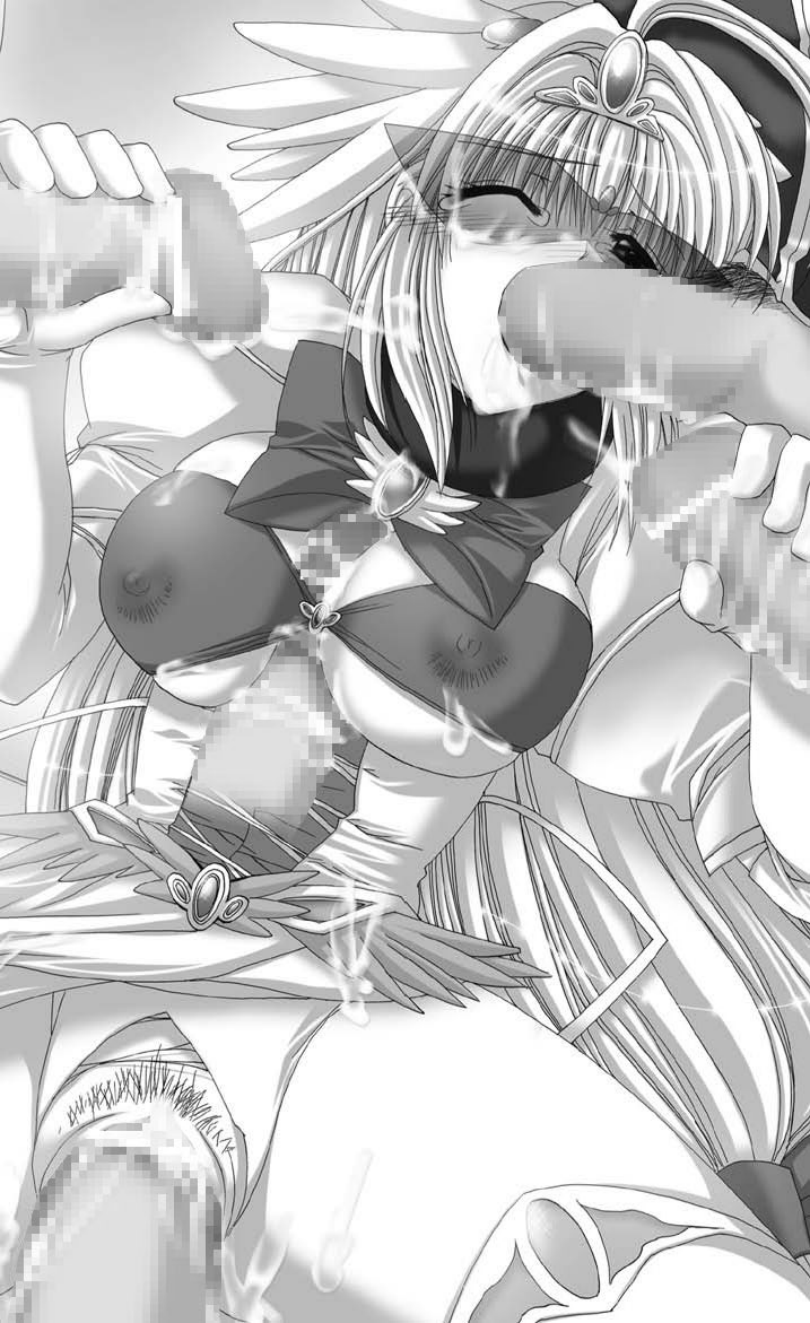
さまざまな男たちがいた。舞踏会で、カスタローゼにダンスの相手を必ず求めてくる、生まれながら貴族としての誇りに輝く紳士や、遠くから熱い視線で見詰めては、身分違いの恋に悶々としていた若き俊才を謳われる官僚などの姿もあった。仕事熱心な侍従に、姫君の日常では決して目にする事のない庭師などもある。

「ひゃ……いや、こんなの……もう……いや……みなさんやめてください」

口が開いたときに懇願してみるが、だれも聞く耳を持ってくれない。ふと脇を見ると、白いメイド装束のアーネがいる。白い？ ……彼女にも多くの男たちが乗って、容赦のない輪姦が行われた結果である。

捕らわれの天使は自分の身体を確認することはできなかったが、おそらく同じようなありさまになっているだろう。あたりには噎せ返るような牡の匂い、黄金の髪や、薄紅色も





白い粘液によって染まっている。

いつしか、気高き斎王を支えていたなにかが、音も立てず崩れていたらしい。

何人目の男が腔に入ってきたとき、カスタローゼは自分から腰を振り始めていた。

この生きる屍どもの腰使いは、激しいだけでちっともよくないと思っていたのだが、いつしか、女体が快楽を覚え始めてしまったのだ。そして、肉体から頭までもが支配されてしまったように、ほとんど無意識に、もっと気持ちよくなりたいという気分になっていた。

しかし、その動きが邪魔だったのだろう。お尻を高く持ち上げられ、頭を下にした状態で、膝を開いて女の大事な部分を晒した形——いわゆるマングリ返しで固定されてしまった。

自分の陰部を醜く感じるカスタローゼは直視することに嫌悪感を覚えていたが、溢れ返る白濁液まみれのうえ、そこにぶつと肉棒を打ち込まれ、グチュグチュと掻き回される光景がこの姿勢だと否応なく目の前である。

その犯される姿に魅入られてしまった。自らを厳しく律する斎王には、想像もしえない卑猥さ、そして、それが自分なのだという事実には、言いようのない興奮を覚えていたのだ。「くううう、くる……なんかくる……なんかくる！」

子宮口がドストドスと打たれていた。下腹部で熱い液体が蠢いている。なにかとんでもない崩壊がくる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**